

国際教養学部

Summer School in Human Sciences

Multilingual communication in multicultural teams(6/10-14)

▽概要

上記の期間中、フィンランドにあるユヴァスキュラ大学のサマースクールに参加しました。今年の8月からの派遣留学先でもあります。今回、事前に留学先に行く目的は2つありました。1つは、派遣留学先での専攻と近い分野(派遣留学先はCourse of Intercultural communication)であるため、どのように授業が行われているのか前もって体験し、長期留学まで、事前にどのような学習をすれば良いのか(予備知識として日本語の文献だけでなく英語の文献にも触れるため)明確にすること。また、専攻分野の教授やInternational Officeの方と面識を持つことも目的でした。

さらに、プログラムのちょうど中盤の12日の午後の時間を使って、Address term(呼称)を通して、社会構造・人間関係構築を考えるとという内容のプレゼンテーションをしました。千葉大学ですで行っていた調査の分析報告と、それと同様のワークショップを行いました。

5日間という非常に短い期間でしたが、学習面の収穫だけでなく、このプログラムを通して出会えた人たちの暖かさを感じられ、とても実りのあるものになりました。

▽プログラムについて

・内容

参加者は、イギリス、アメリカ、カナダといった英語を母語とする学生のほか、ドイツ、香港、フィンランドの学生、千葉大からの参加者2名をあわせて11人と、教授が3人でした。授業時間は、9時半から15時頃までで、お昼休みの1時間はクラスの人たちと大学内のカフェでご飯を食べていました。放課後は、友人やチューターと買い物やカフェに行ったり、フリープログラム(サマースクール参加者が無料で参加できるアクティビティ。フィンランド式サウナやBBQなど)に参加したりしていました。

大まかな内容を説明すると、'Multilingual communication in multicultural teams'というコースの名の通り、様々な言語・文化が存在するグループの中活動する際に、アイデンティティとどのような関係があるのか、その際起こりうる弊害など、ディスカッションやアクティビティを通して体験することの多い授業でした。例えば、自分の弱さ(weakness)は何かを話し合ったり、4人グループになって自分の母語で伝言ゲームをするといったことをしました。どれも初めてのことでとてもわくわくしたのを覚えています。そして、'Share and Find similarities'がテーマとなっていた、最終日のプレゼンテーション(3,4人のグループに分かれる)に向けて、フィールドワークも行いました。このフィールドワークでは、はじめは気づけず知らずの学生同士がどのようにSimilaritiesを見つけ、グループを機能させていくのかという過程を、写真撮影と提示されているディスカッションクエストを検討しながら、最終プレゼンを作り上げるというものでした。わたしは、ドイツ、香港、フィンランドの学生との4人グループでした。

・印象

授業全体を通して、1番の障害となったのが言語の問題でした。前に述べたとおり、千葉大からの参加者以外の学生は、ネイティブ、またはほぼネイティブ並みの英語話者であること、また、教授が話している途中でもずっと学生が挙手して意見を言うという積極的な姿に驚いてしまい、初日を不安な気持ちで過ごしました。教授もネイティブ英語話者ではないの

で、英語は聞き取りやすく、ほぼ講義の内容は理解できたものの、聞き取るのに精一杯で、意見や疑問点を考える余裕がまったくありませんでしたし、自分の英語力のなさに自信を失くしてしまいました。

2日目以降はディスカッションが多くありました。その際、周りの友人や教授がわたしの意見が伝わるように手助けしてくれました。教授はなるべくわたしの近くに来て話を聞いてくださったり、日本語を勉強したことがある香港の学生に「○○ってなんて言うんだっけ？」と尋ねると英語にするのを助けてくれたり、そしてクラス全体が、特に'Multilingual communication'の授業だったからこそからかもしれませんが、そのような雰囲気を受け入れてくれたことで、だんだん自分の意見を授業中に発言することに抵抗がなくなってきました。しかし、グループディスカッションでのテンポの速さには最後までついて行けず、「わたしはこうしたい」と提案したりすることもほぼできず、グループでの自分の役割は何なのか、という戸惑いがありました。それに加え、他のグループとは異なり、発表の時に即興で言いたいことを言う流れになってしまい、発言はしましたが、内容も量も他の人と比べるとかなり少なくなってしまう、悔しい思いをしました。

▽おわりに

このプログラムを通して学んだことは、いくら事前に勉強したりシミュレーションしたりしていたとしても得られるものではなかったと思います。

ネックになっていた語学力については、周りの英語のスピードに流されてしまっていたことに最終日に気づきました。ゆっくり話してもいいし、その方が落ち着いたので考えがまとまりました。周りのペースに巻き込まれて萎縮してしまう必要はなく、自分の思ったことを共有することも大切だと感じます。「くだらない質問なんてない」と教授がおっしゃっていたように、何が正しくて何が間違っているというものはないし、小さな気づきにも価値があります。周り比べてしまい、うまくできないことが目につきがちになって自信をなくすこともあります。もっと自分のできたことに気づくことを忘れずにいたいです。

そして、この短い間にできた友人に感謝しています。放課後のフリータイムプログラムで、友人とサウナに入った後湖に飛び込んで大笑いしたこと、真夜中のユヴァスキュラの街を歩いたこと、帰国日に朝5時に起きて見送ってくれたこと、とても温かい人たちに出会えました。今でも連絡を取り合っているし、近いうちにまた会えることを願っています。また、準備を手伝ってくれた大学の友人、教授、支援室の方、このプログラムに参加するにあたりわたしに関わってくれた人たちすべてに感謝します。夏から始まる派遣留学に必ず活かしていきます。



←フリープログラムに参加したときの風景



最終プレゼンの様子→